

# 東南部九州細石刃石器群における石器石材の利用とその特質

## — 桐木耳取遺跡細石刃石器群の分析から —

芝 康次郎

### はじめに

1953年の矢出川遺跡の発見を契機に始まった細石刃石器群研究は、細石刃核の多様性ゆえに、当初からその観察に基づく細石刃製作技術の分類を基礎とした研究を中心に進められてきた。近年、技術型式学的な視点を導入した編年研究（寺崎1999）や遺跡構造に視点を当てた研究が見られるようになり、研究は新たな展開をみせている。特に石材利用に焦点を当てた行動論的研究の進展には目を見張るものがある（堤1996）。

しかし、九州では、現在でも細石刃石器群の編年研究が主体であり、行動論的研究はほとんど進展していない。一方で、その素材となる石材は多様であり、また遺跡数も多いという点で、こうした研究を行う絶好のフィールドになりうる。ただ、その前提となる石材原産地の詳細な研究や理化学的分析が進んでいるとは言えず、行動論的研究を困難にしていることもまた事実である。しかしながら、細石刃石器群の主要石材である黒曜石は肉眼観察においてもある程度分離可能であり、徐々にではあるが、理化学的分析例も蓄積されつつある。理化学的分析例と肉眼観察とを併用することで、その不足を補うことができるものと思われる。

本論は、この石材利用に焦点を当て、特に腰岳産黒曜石の南九州細石刃石器群中でのあり方を分析し、これらの地域の人々の行動領域やそのパターンを捉えようとするものである。これによってさらに一歩進めて、石器石材利用から人々の行動を復元していく。

### 1. 研究史と問題の所在

石器石材の原産地を特定できれば、その原産地と消費地との関連性が直接的に把握でき、その背後にある集団の行動領域や交換を通じた集団間関係を読み取ることが可能である。このことから、1970年代にはすでに石器石材の獲得に焦点を当てた研究がなされ（小野1975など）、その研究は遺跡構造の研究と相俟って、遺跡間での石材消費の連鎖およびその断絶の検討から集団の行動や領域を明らかにしている（国武2004、田村2005）。九州における石器石材に関する研究も、当初から原産地と消費地との関係を明らかにしようという方向性をもっている（吉留1983、綿貫1992、荻1998）。これらの研究は石材の消費過程、すなわちコア・リダクションを原産地と消費地との関係で捉えたものである。

リダクションとは、石器の形態が、原石の入手から石器の製作、使用、刃部の維持、再加工、再使用そして廃棄に至るライフヒストリーの各段階で変化していく過程のことであり（長崎2000）、このリダクションに焦点を当てることによって、人々による石材消費活動ひいては行動領域が推定可能である。リダクション戦略に関する研究は、石器石材と石器形態との関連性や原産地と消費地との位置

関係と石材消費との関連性を明らかにしようとするという方向性に違いはあるものの、両者は、石材と石器製作とに焦点を当てていることで一致している。しかし、その中には使用の局面を考慮に入れた研究がきわめて少ない。そうした中でわずかながら使用痕分析を取り込んだ研究がある。

中ッ原1遺跡G地点の細石刃を分析した美安慶子は、個別別資料分析と使用痕分析とをリンクさせることによって細石刃のライフヒストリーを明らかにした(美安1996)。美安の研究の評価すべき点は、従来、細石刃の使用痕分析が機能の推定にとどまっていたのに対し、それを遺跡に差し戻して、個別別資料からみた遺跡への石器の搬入や搬出を論じた点にある。米田寛は、多摩欄坂遺跡と横田遺跡出土の細石刃の使用痕とその分布を検討することによって、ベースキャンプ的機能を持つ遺跡(I類)とレジデンシャル・キャンプ(II類)という遺跡の機能差を見出した。そしてこのI類遺跡の累積性とII類遺跡の1回性という性格から「I類→II類→I類」という循環的活動形態を予測した(米田2002)。米田は、特に細石刃の機能を検討対象に据えることで、細石刃の機能と遺跡間の関係性を明らかにしようとした。

ともに細石刃の使用痕分析を軸に遺跡内外の集団の行動に迫ろうとしており、従来、機能推定にとどまりがちであった使用痕分析を一步進めて、行動復元の素材へと昇華させた点で評価される。しかし、両者は石材ごとの使用痕の差異に言及したわけではなく、遺跡同士における細石刃使用痕の差異の指摘にとどまっている。石器の再利用が進んでいけば、もちろん使用量も増すわけで、それは使用痕という形で現れるはずである。石器の形態が石器石材の入手から廃棄までの各段階において変化していくのならば、石器の製作のみに焦点をあてるだけでは不十分である。

旧石器時代の人々が遊動生活を繰り返し、さらに石器が石材獲得→製作→使用→(再加工・再利用)を経て廃棄されたという前提に立てば、そうしたリダクション戦略が内包されていることは当然想定される。石器の形態が、石器石材の入手から廃棄までの各段階において変化していくのならば、石器の製作のみに焦点をあてるのではなく、「使用」の局面にも焦点を当てる必要がある。そうした意味で、使用痕分析をリダクション戦略の理解に取り入れるということは非常に意義深いものと考えられる。具体的には、石器石材の消費度の違いから遺跡内における道具の廃棄やメンテナンス、製作などを想定でき、これらの遺跡内における分布状況を見ることによって石器製作の場や集団の違いを抽出できるものとする。また、使用度の差異を抽出できたならば、それらの遺跡間を超えた利用状況を推定できる。その「使用」に関しても遠隔地産石材と在地産石材と対比によって、リダクション戦略がより理解しやすくなると考える。

## 2. 研究の目的とその方法

本論の目的は、遠隔地産石材である腰岳産黒曜石がどのように利用され、入手されているかについて明らかにすることである。この対象として東南部九州の細石刃石器群を挙げる<sup>1)</sup>。この石器群には多様な石材が見られるが、この中に遠隔地産石材である腰岳産黒曜石が少量組成される。まさに遠隔地産石材と在地産石材とが入り混じる石器群である。原産地からの距離は大隈半島で200kmを超える。この黒曜石は一体どのように遺跡内に持ち込まれたものなのだろうか。この遠隔地産石材と在地産石材との入手方法や利用方法を明らかにすることによって、東南部九州の細石刃石器群を残した集団の行動を知ることができる可能性がある。腰岳産黒曜石が東南部九州の細石刃石器群に入る現象の背景について、これまでの研究(小野1975・春成1976・田村1992)から以下のような4つの状況が想定さ

れる（第1図）。

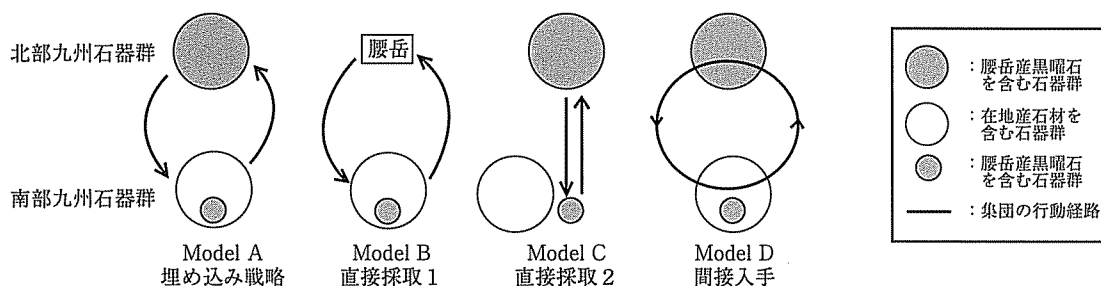
Model A（埋め込み戦略）：腰岳産黒曜石が主体である北部九州の細石刃石器群と南九州の細石刃石器群が同一集団によって残されたもので、移動の過程で消費した結果、少量の腰岳産黒曜石が南九州の細石刃石器群に残された。

Model B（直接採取1）：北部九州の細石刃石器群と南九州の細石刃石器群が別の集団によって残されたもので、南九州の細石刃石器群を残した集団が直接原産地に赴き、石材を採取し、遺跡地に回帰した。

Model C（直接採取2）：南九州の細石刃石器群中に見られる在地産石材の石器群と遠隔地産石材の石器群とが、それぞれ別の集団によって残されたものである。

Model D（間接入手）：北部九州の細石刃石器群と南九州の細石刃石器群が別の集団によって残されたもので、南九州の細石刃石器群を残した集団が間接的に少量の黒曜石を入手した。

今回は、鹿児島県の桐木耳取遺跡を主たる分析対象とし、この仮説の検証を行う。そのために、ブロック間の関係を検討し同時存在の可能性の高いものに区分した上で、①遺跡内での遠隔地産石材と在地産石材製石器の搬入形態、製作、使用、廃棄の状況の差異を明らかにする。②遺跡外に視点を移し、周辺地域における状況を検討し、東南部九州細石刃石器群の石器石材の入手とその利用に関する特質を明らかにする。



第1図 遠隔地産石材入手モデル

### 3. 桐木耳取遺跡細石刃石器群における石器石材利用

#### 3.1. 遺跡の概要と石器群の分布

桐木耳取遺跡は鹿児島県曾於郡末吉町大字諏訪方および財部町大字南俣に所在し、地理的には大隈半島の最北端に位置する旧石器時代から古代にかけての複合遺跡である。本遺跡の報告は国土交通省桐木遺跡（以下国交省桐木遺跡）（中原編2002）と日本道路公団桐木耳取遺跡（公団桐木耳取遺跡）（長野・馬籠ほか2005）との2つに分かれている。遺跡としては同じであるが、文化層の区分が若干異なっている。前者では、旧石器時代の遺物包含層はⅠ～Ⅳ文化層、縄文時代草創期の遺物包含層は第Ⅴ文化層で、そのうち細石刃石器群は第Ⅲ文化層から第Ⅴ文化層の中に含まれる。しかし、後者においては第Ⅲ文化層（ⅩⅡ～ⅩⅧ）として細石刃石器群と縄文時代草創期の遺物に関しては明確には区分されておらず、一括されている。ここでは両者をまずは桐木耳取細石刃石器群として一括に取り

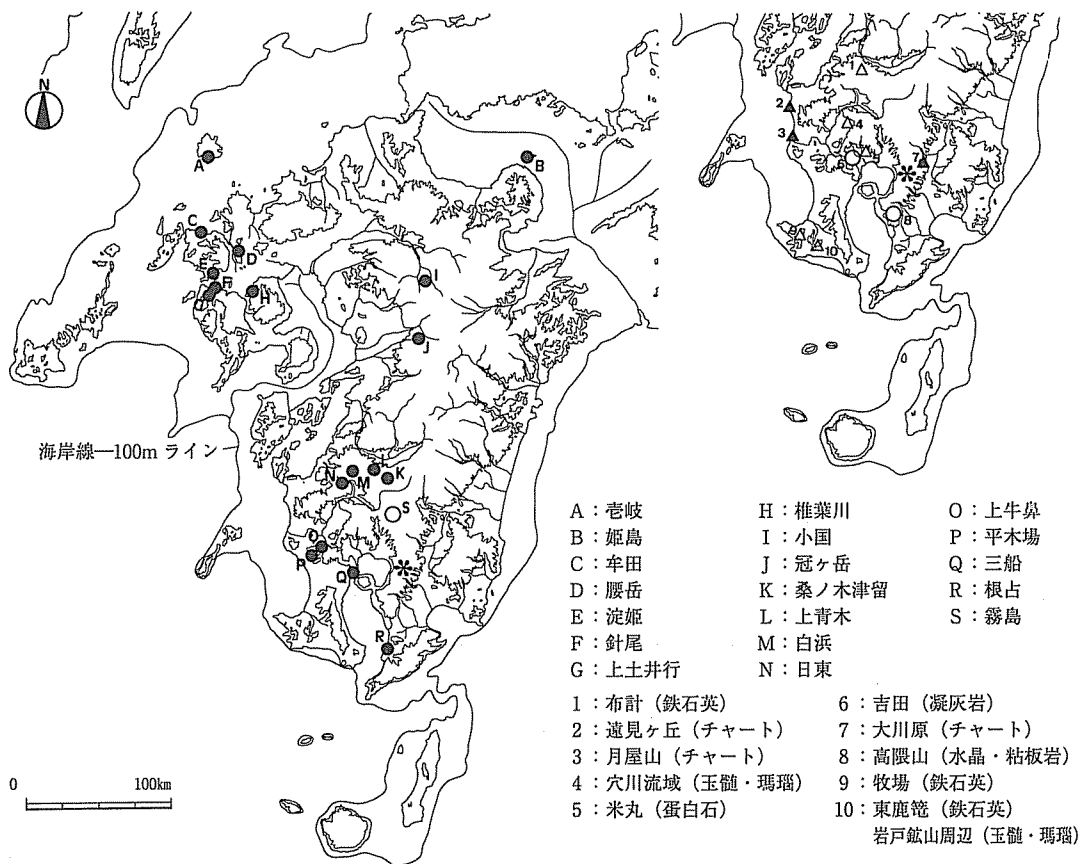
扱い、垂直的・平面的分布を検討した後に区分を行うこととする。

平面的には東西方向に直線で約500mの間に連綿と出土し、それらは一定のまとまりをなして分布する。公団報文中で「ブロック」と「エリア」が設定されており、「ブロック」は石器の出土状況が一定の集中状態を示す場合に、「エリア」は作業上の便宜的なものとされている。そうして区分されたエリアは36、ブロックは53、国交省桐木遺跡の分を含めると、ブロックは78にのぼる。これら全てが同時存在というわけではないと考えられるため、次節で区分を行う。

### 3.2. 分析の前提

**石材環境** 本遺跡を取り巻く石材環境について整理しておく必要がある（第2図）。本遺跡の大隈半島北部には、現在確認されている黒曜石産地は存在しない。しかしながら、南九州全体を見渡すと、国見山地付近に西から日東、五女木、白浜、桑ノ木津留など、薩摩半島北部には上牛鼻、平木場、薩摩半島中部には三船、そして大隈半島中部に長谷など多くの黒曜石産地が存在する（第2図左）。これらの産状や石材の特徴に関しては馬籠亮道によって紹介されている（馬籠2002）ので、ここでは詳述しない。また、黒曜石以外の頁岩やチャート、水晶、鉄石英などの石材も少なからず利用されており、南九州における石器石材利用の多様性を示している（宮田1994、2002）。

近年、黒曜石に関しては内屋敷U T遺物群などの産地未詳のものが認識されつつある。この黒曜石は、その分布範囲が霧島の南部地域一体に広がっているために、「霧島系」と呼ばれているが、



第2図 桐木耳取遺跡の位置と石材環境（左：黒曜石原産地、右：非黒曜石原産地）

残念なことに明確な産地は突き止められていない。この黒曜石は形態的には小角礫が多く、黒色で透明感が強い。そのため一見すると、腰岳産黒曜石と区別するのが困難な場合がある。これまでの肉眼による石材鑑定で、腰岳産黒曜石と誤認されているものも数多い。しかしながら、礫面の状況、質感、不純物の入り方等である程度分類は可能である。今回対象とする桐木耳取細石刃石器群でも多量に出土しており、国交省桐木遺跡報告において、出土細石刃核の蛍光X線分析が行われている。今回はこの結果を参考にしながら肉眼観察によって石材分類を行い、各黒曜石製石器の産地を推定した。

第1表にはエリア・ブロックごとの石材利用状況を示した。これによると、割合的に見れば、「霧島系」黒曜石が最も多く利用されており、補完的に他の石材が利用されるという状況が見て取れる。しかし、ブロック別にみると、「霧島系」黒曜石ではなく、他の石材が主体を占めることもある。よって、霧島系黒曜石を主体とするブロック（10エリア33ブロック）、上牛鼻産黒曜石を主体とするブロック（3エリア4ブロック）、頁岩を主体とするブロック（1エリア1ブロック、その他は石鏃石器群）、多様な石材が混在するブロック（4エリア2ブロック）とまとめることができる。

**石器集中部の空間的・時間的区分** 桐木耳取細石刃石器群は、平面的に見ると、直線で東西500mの範囲に連綿と広がる石器群である。これらが同時に形成されたとは考えにくく、このため石器集中部（以下ブロック）同士の同時性が問題となる。残念ながら石材の個別別資料や接合資料の提示がないため、それらによる厳密な同時性の検討ができない。しかし、幸運なことに、この大隈半島北部地域は火山灰が非常に厚く堆積していて、層位的区分が可能であり、この点が本文中でも述べられている（長野・馬籠ほか2005）。さらに平面的に見てもブロックとして別個のまとまりをもつことなどから、時間的にも空間的にもある程度区分することが可能である<sup>2)</sup>。ここではそこに細石刃製作技術の検討を加えて細分を行う。

①最も先行する細石刃石器群

X II層に出土ピーク：第27エリア第51エリア、第33エリアなど  
（隣接する第26エリア石鏃石器群よりも20cm下層）

②次段階に位置づけられる細石刃石器群

X層下部からX I層に出土ピーク：第24エリアなど

③石鏃を主体とする石器群

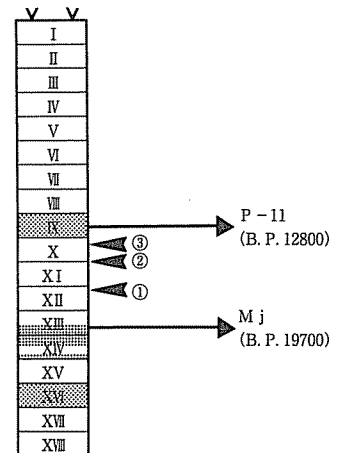
X層に出土ピーク：第18・19・20（22・23）・26エリアなど

この層位的区分は細石刃製作の技術的側面から見ても肯定できる。

X II層を主体として出土する細石刃石器群（第27エリア第51・52ブロック・第33エリア石器群など）（第4図上）の細石刃製作技術は、①礫面を大きく残す、②礫の一面に作業面を設定し、細石刃剥離を進行させる、③打面再生を行うという特徴がある。

X I～X層に出土層準をもつ細石刃石器群（第24エリア第37ブロック石器群など（第4図下）の細石刃製作技術は、X II層石器群と比較し考えると、①打面転移を行う、②剥片素材の利用という特徴がある。さらに、X層中では船野型や福井型に非常に近い特徴をもつ細石刃核が見られる。

出土する細石刃核の大部分は、これまでの細石刃製作技術の分類に照らせば、野岳・休場型と呼ば



第3図 層位的出土状況<sup>4)</sup>

れる一群に相当すると考えられる。特にXII層に出土層準をもつ細石刃石器群は、「野岳・休場型」単純段階に相当するものと考えられる。これに対して、XI～X層に出土層準をもつ細石刃石器群は「野岳・休場型」と呼べるものもあるが、技術的特徴から一線を画すると思われる。野岳・休場型細石刃核が単純に組成される段階を細石刃石器群編年の初期段階に当てる考え方は、九州では一般的になりつつある（川道1997、桑波田1997、杉原1997、宮田2004など）。桐木耳取遺跡での出土状況はこ

第1表 エリアごとの石器石材組成状況<sup>3)</sup>

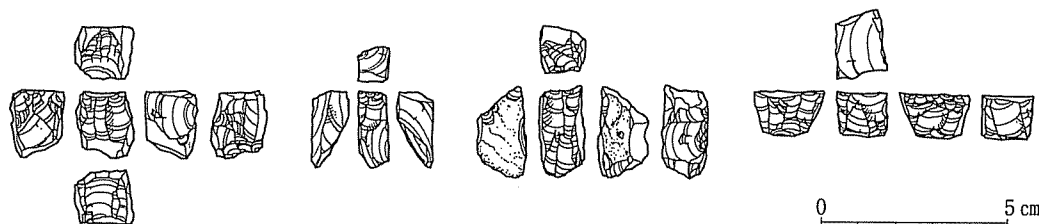
石材		上牛鼻	三船	霧島・桑ノ木	腰岳	針尾系	椎葉川	CH	SH	CR	OP	
公 団 桐 木 耳 取	第3エリア			3								
	第4エリア	1		1				1				
	第5エリア	1		16		1						
	第6エリア			59 4	3							
	第7エリア			4 2					63	2		
	第9エリア	11		62 6	22	1		2	1			
	第10エリア	1										
	第11エリア			28								
	第12エリア	1	5	129 1								
	第14エリア			1								
	第15エリア			3 1				1				
	第16エリア			1								
	第17エリア	6 1	1 1	6 1				3	1		1	
	第18エリア	3 4	1 18	3				5		2	3	
	第19エリア	1		5 2		3			1			
	第20エリア	1	1	1 2							1 2	
	第22エリア	53		28 19		1			1			
	第23エリア	15 6		29 10								
	第24エリア	21 13		45 27					1			
	第25エリア	2		3 2								
	第26エリア			1 2								
	第27エリア			141 12								
	第29エリア			4								
	第30エリア	12		6 1					1			
	第32エリア			1								
	第33エリア			6 5								
	第34エリア			1 2								
	国 交 省 桐 木	第1集中部	1		4 8							
		第2集中部	11 1	1								
		第3集中部	14 10		27 54					1		
		第4集中部	1 1		5 16							
		第5集中部	1		1 4							
		第6集中部			4							
		第7集中部			2 2		2					
第8集中部					1							
第9集中部		4 1		5 2								
第11集中部		4										
第12集中部		6 2		11 6					2			
第13集中部				66	3	2						
第14集中部		1		75 3								
第15集中部				5 5								
第17集中部			27									
第18集中部	1		14				1	1				
第19集中部			5									
第20集中部			7 1	1								
第21集中部			9 5		1							
第22集中部			5 1	6								
第24集中部					2 1							
第25集中部			10									
第26集中部			5 3									
合計		170 42	8 22	865 215	36 0	13 1	0 0	13 0	73 2	2 0	4 3	

れを裏付けている<sup>5)</sup>。しかし、一方でX~XI層でも出土することを考えると、野岳・休場型細石刃核は、時間的表象としては機能しない可能性がある。結局は、野岳・休場型の範囲をどこまでにするかという問題になるが、再定義は接合資料に基づく製作技術の把握がなされない限り難しい。

しかしながら、この層位的変遷をみると、細石刃剥離の進行やその素材に違いが見られるように思われる。すなわち、打面再生によって細石刃剥離を続行させるものから打面転移を行うことによって、細石刃剥離を継続させるものへの変化である。両者とも野岳・休場型とするにはなお問題が残るが、ここでは仮に前者を「野岳・休場素材依拠型」、後者を「野岳・休場素材対応型」として論を進めていく<sup>6)</sup>。

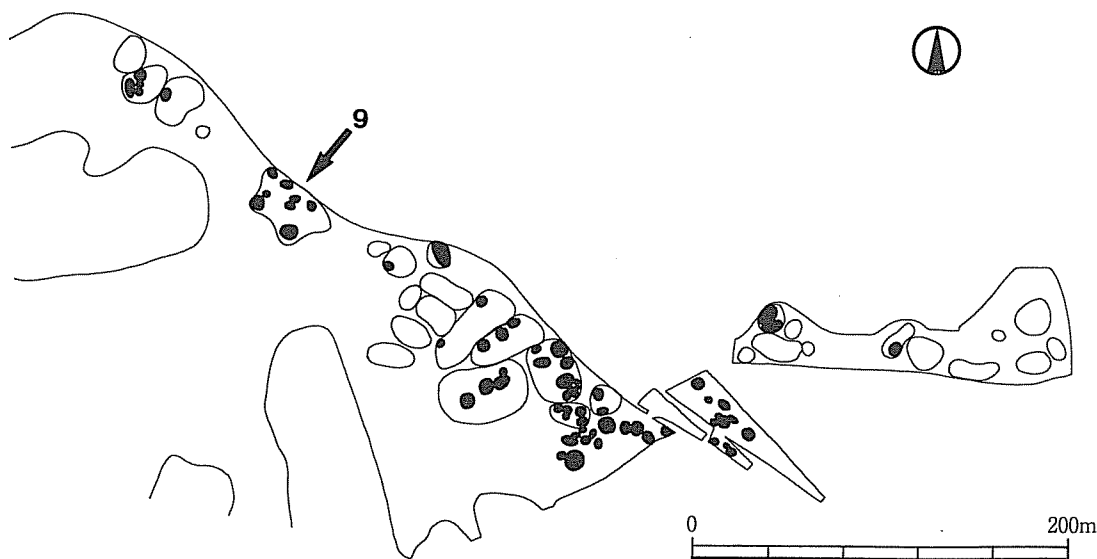


第27エリア第51ブロック



第24エリア第37ブロック

第4図 桐木耳取細石刃石器群の編年的区分



第5図 桐木耳取細石刃石器群の平面分布

### 3.3. 第9エリア細石刃石器群の分析

本節では第9エリアの細石刃石器群について分析していく。第9エリア石器群を選定した理由は、当該石器群がその他石器群との重複が少ないという点や、そのエリア内に腰岳産黒曜石が入っている点などから、分析対象として格好の資料であると考えたためである。

第9エリアの細石刃石器群は、平面的に見ると、独立した丘陵上に分布しており、石器集中の重複があまり見られない(第5図)。層位的にはX層下部からXI層に出土ピークを持つ。先の層位的位置に照らし合わせると、②に近い。細石刃製作技術の特徴を見ると、傾斜打面を持ち、石核調整をほとんど行わない、打面転移を行うという点で野岳・休場素材対応型である。利用石材は、霧島系黒曜石を主体とし、細石刃核6点、細石刃52点に調整剥片数点を伴う。その他に上牛鼻産、桑ノ木津留産、三船産、腰岳産の黒曜石が見られ、非黒曜石石材として頁岩が加わる。

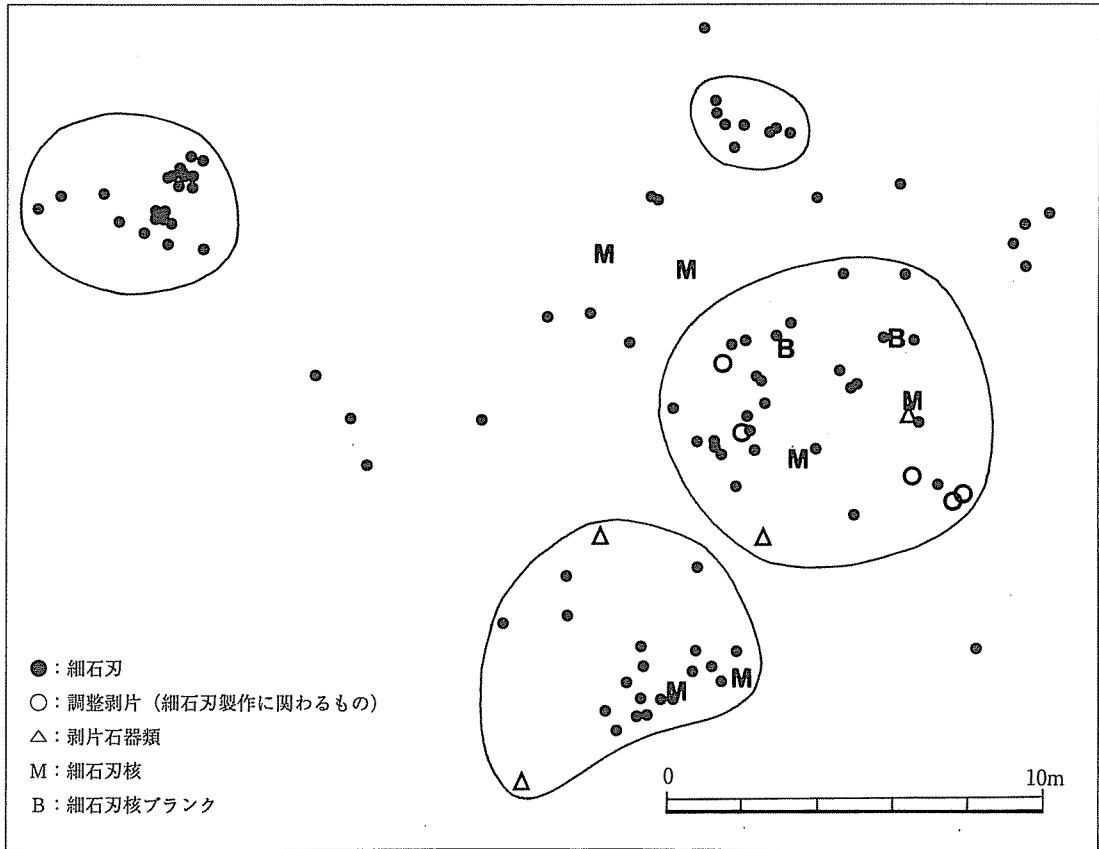
こうしたデータを見ると、霧島系黒曜石を主体としながら、補完的にその他石材を用い細石刃製作が行われたエリアであると言える。ただし、これはエリア内の石器数であって、細かく見ると数ブロックに分かれている。ここで、細石刃とその製作に関わる剥片類の分布からブロックの細分化を行う。ブロックを細分すると、大きく2つに分類可能である。まず1つは、細石刃核、細石刃、調整剥片等で構成され、細石刃製作が行われたと思われるブロックである。ここではブロック類型Aとしておく。もう1つは、細石刃のみで構成され、細石刃のみが廃棄(遺棄)されたと考えられるブロックである。ここではブロック類型Bとしておく。これを図化すると第6図のようになる。

**細石刃の使用痕** 次に細石刃の消費活動を考えるために、細石刃の使用痕分析を行う。今回の分析では使用の有無の検討が主目的であるため、使用部位、使用方向の推定にとどめた。そのため観察したのは線状痕・微小剥離痕で、ポリッシュの検出は行っていない。顕微鏡観察に先立ち、エタノールをつけた脱脂綿で石器表面から油脂分を取り除いた。観察にはルーペ(20倍)と実体顕微鏡(Nikonエクリプス150)を用い、40倍にて観察を行った<sup>7)</sup>。観察は刃部を中心に細石刃の全面を検討している。微小剥離痕の分類は御堂島分類に従った(御堂島1982)。

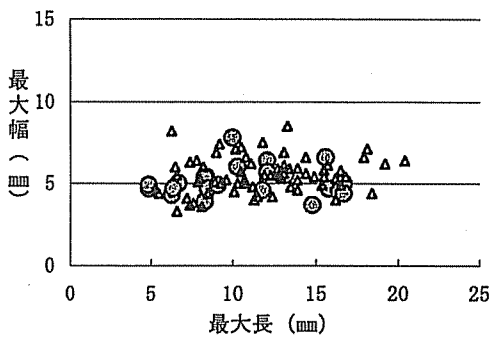
使用痕分析の結果、認められた線状痕の総数は101個体中、50個体であった。これらの線状痕は全て刃部に平行するもので、それが細石刃の腹面全体に及ぶものもあった。これを石材ごとに見ると、本エリアの細石刃製作の主体をなす霧島系黒曜石製細石刃は57個体中15個体(26%)に使用痕が認められた。上牛鼻産黒曜石製細石刃は風化が激しく、線状痕の確認はできなかったものの、微小剥離痕「中・分布D」をもつ細石刃が1点認められた。一方、遠隔地産石材である腰岳産黒曜石製の細石刃は21個体中18個体(86%)に使用痕が認められた。実に80%以上の細石刃に使用痕が認められることになる。より明瞭なのは、細石刃製作の主体を占める霧島系黒曜石製の細石刃に比べて、エリア内に細石刃製作の痕跡がない状態、すなわち、製品の状態(植刃状態の可能性もある)で搬入された可能性の高い腰岳産黒曜石製細石刃に、使用痕のあるものが多いということである。報告者も、微細な剥離痕や側縁部の損傷の比率が他の細石刃と比べて高く、細石刃の形状は総じて細身であることを指摘している(長野・馬籠編2005, pp.384-386)。ただし、この形態的特徴に関しては、全て当てはまるわけではない。第7図は第9エリア出土の細石刃の形態的特徴をグラフ化したものであるが、これを見ても、腰岳産黒曜石製細石刃の形態的特異性が指摘できるわけではない。逆に、使用痕のある細石刃の形態的な斉一性が見られるというところに特徴があるように思われる。しかしながら、幅に関しては5mm前後という斉一性は見られるものの、長さに関しては5mm前後のものから2cm前後のものま



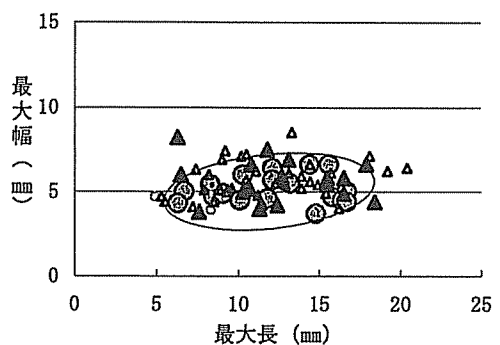
で使用痕が認められる。この点は、小畑がココレヴォ I 遺跡の植刃器に装着されている細石刃から推定したように（小畑2001）、一定の幅の中で選択的に使用されていたことを示すと理解しておきたい。より重要なことは、5 mm前後の幅をもつ細石刃に使用痕のあるものが多いという点である。これは本石器群を残した人々の目指すべき細石刃である可能性が高い。



第6図 第9エリアにおける細石刃石器群の分布



● : 腰岳産黒曜石製  
○ : その他の黒曜石製

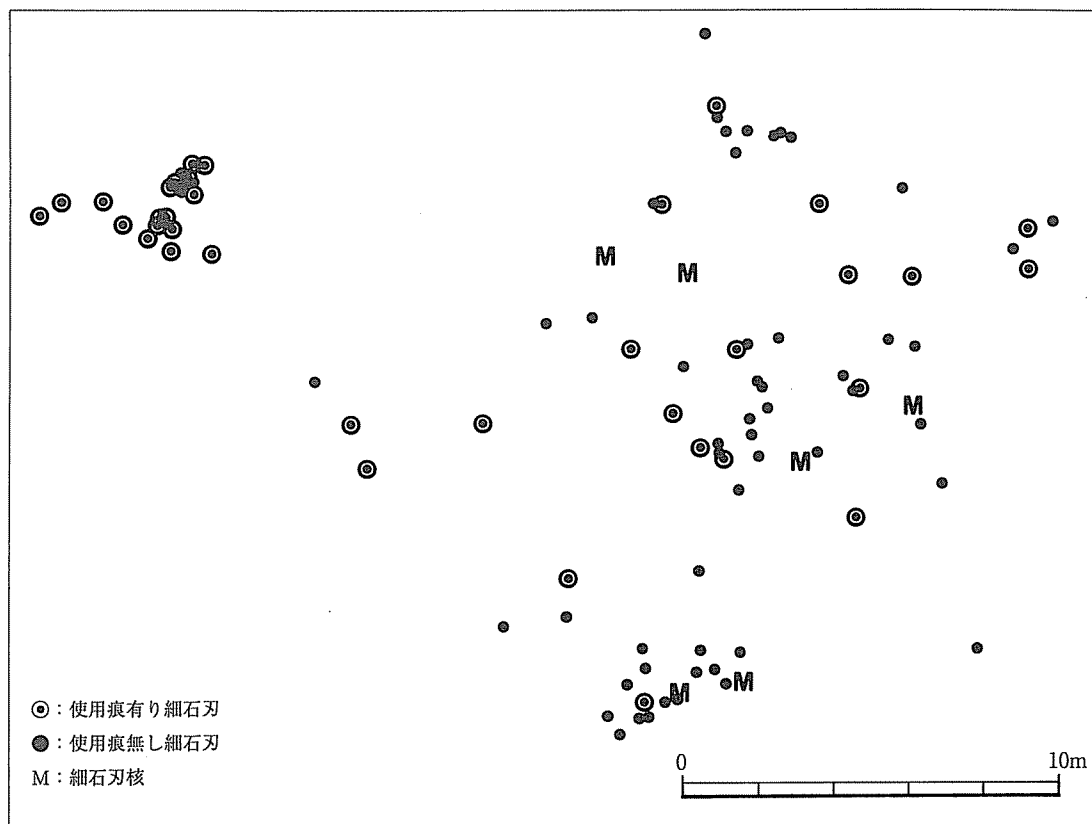


● : 腰岳産黒曜石製（使用痕有） ▲ : 霧島系黒曜石製（使用痕有）  
○ : 腰岳産黒曜石製（使用痕無） △ : 霧島系黒曜石製（使用痕無）

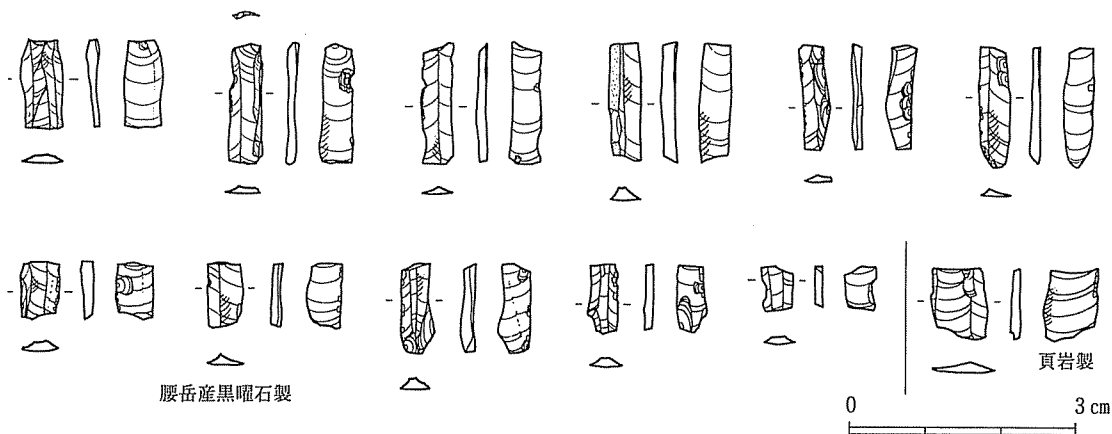
第7図 第9エリア出土細石刃の形態的特徴

使用痕のある細石刃の分布 第9エリアの石器分布について、ブロック類型ごとに細石刃の分布を見ている（第8図）。ブロック類型Bにあたるブロックは2ヶ所あるが、そのうち1ヶ所の2個体中18個体に使用痕（第9図、写真1）が認められる。このブロックは腰岳産黒曜石製細石刃19点、頁岩製細石刃2点で占められ、そのほとんどに使用痕が認められることになる。こうした使用痕のある細石刃はブロックとして集中分布しており、そのブロックが製作痕跡の認められるブロックと隣接している。もう1ヶ所では、これとは対照的に使用痕の認められる細石刃は8点中1点のみである。石材は全て霧島系黒曜石であり、先のブロックとは石材の上で違いがある。一方のブロック類型Aの2ヶ所とも霧島系黒曜石製細石刃の主体を占めるが、66個体中18個体に使用痕は見られる。使用痕のある細石刃は散漫な分布を示しており、集中する様相は示さない。この点はブロック類型Bとの対照的なあり方である。

ブロック類型Aとブロック類型Bとの細石刃の使用痕のあり方を比べると、前者に属する細石刃よりも、後者に属する細石刃のほうが、より使用痕を有するものが多い。さらに分布に関しては、ブロック類型Aに属する使用痕のある細石刃は散漫な分布を示すのに対して、ブロック類型Bに属する使用痕のある細石刃は集中的な分布を示す。ただし、ブロック類型Bに属しながら使用痕を有しない細石刃もあるし、逆にブロック類型Aに属しながら、使用痕を有する細石刃も存在する。これらの解釈は難しいが、前者の場合、線状痕を持つものの使用頻度が高いとすれば<sup>81</sup>、使用頻度の問題である



第8図 使用痕の有無による細石刃石器群の分布の相違



第9図 第9エリア出土腰岳産黒曜石製細石刃 (S = 1 / 1)

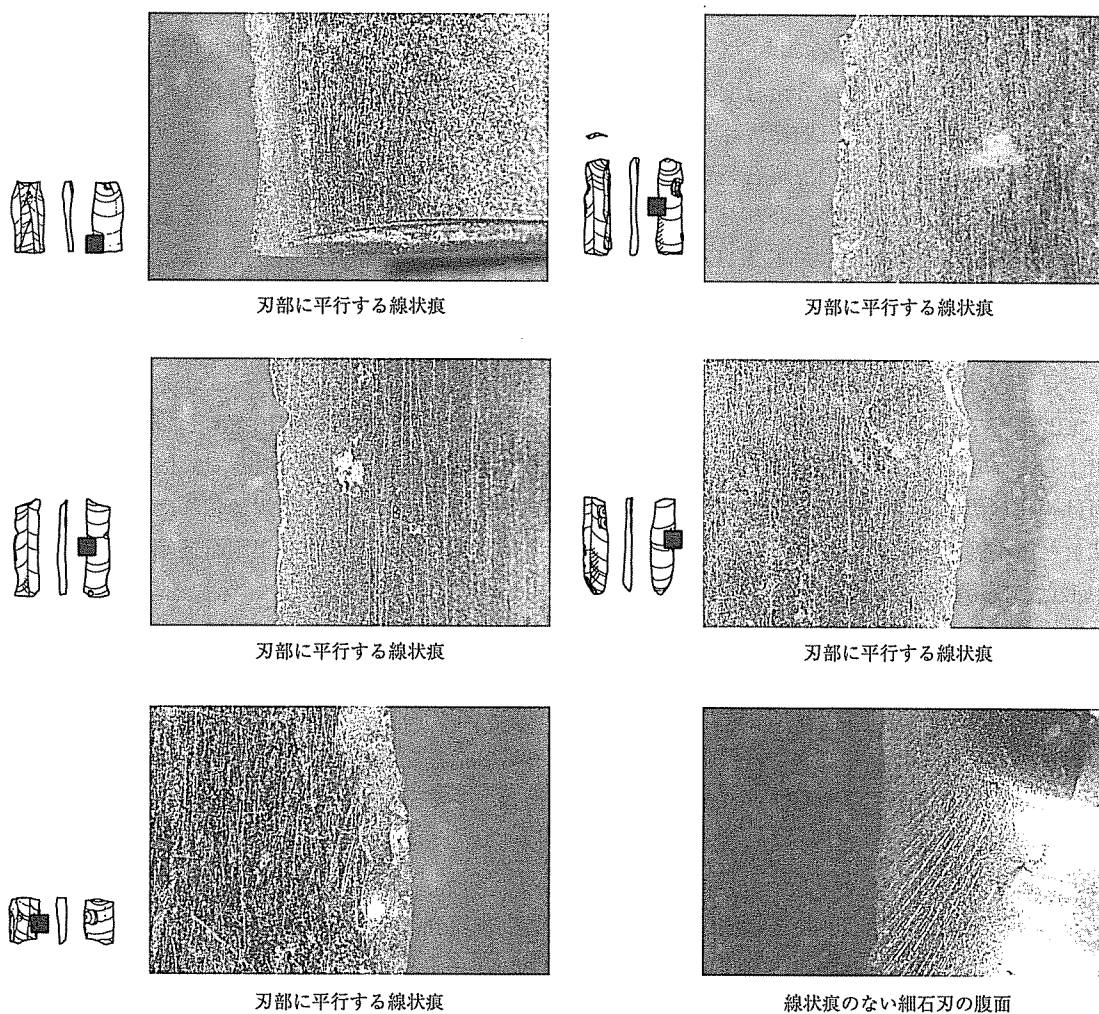


写真1 第9エリア出土腰岳産黒曜石製細石刃の使用痕 (100倍)

ように思われる。逆に、後者のように、遺跡内で製作された可能性のある細石刃が使用痕を有するものが見られるのは、遺跡内で製作され、使用された後に、遺跡内に廃棄されたことを示しているように思われる。

### 3.4. その他のブロックの検討

第9エリアの検討によって、ブロック類型Bに属する細石刃には使用痕のあるものが多く、ブロック類型Aに属する細石刃には、あまり使用痕が認められないということが明らかになった。しかし、一方でブロック類型Bに属する細石刃でも、遺跡内で製作された可能性のある「霧島系」黒曜石製の細石刃にはあまり使用痕が認められないということや、ブロック類型Aに属する細石刃でも使用痕のある細石刃が少ないながらも存在するという事実も確認された。前節では、これを遺跡内で製作されたか、そうでないかの違いによるものと解釈した。このことは他の「エリア」「ブロック」でも言えることであろうか。以下では、第9エリア以外で出土した細石刃について検討していく。その際、前節どおりブロック類型Aとブロック類型Bとに分けて見ていくこととする。

#### ブロック類型A 第12エリア第18ブロック・第27エリア51ブロック

第12エリア第18ブロックでは、X I層を中心として細石刃127点、細石刃核1点が出土している。平面分布は長軸5m、短軸3m程度の楕円形を呈しており、まとまった分布を示している。石材は霧島系黒曜石を主体とし、三船産黒曜石（5点）、上牛鼻黒曜石（1点）、腰岳産黒曜石（4点）が用いられる。このうち後3者の黒曜石製石器は細石刃のみである。本ブロックでは多くの碎片も分布しており、ここで細石刃製作が行われたことはほぼ間違いない。さて、本ブロックにおける細石刃製作の主体である霧島系黒曜石製細石刃117点のうち33点に使用痕が観察された。腰岳産黒曜石製細石刃は4点中3点に使用痕が観察された。こうした遺跡近傍で採取される石材製石器群の中に腰岳産黒曜石製石器が少量組成され、さらにそれらの細石刃には使用痕を有している比率が高いという事実は、前節で見てきた第9エリアの状況と基本的に同じである。

第27エリア51ブロックでは、X II層を中心として細石刃106点、細石刃核10点、その他調整剥片が出土している。石材の主体は細石刃104点、細石刃核10点を占める霧島系黒曜石で、残り2点の細石刃は腰岳産黒曜石製である。霧島系黒曜石製細石刃104点中27点に使用痕が観察された。このうち線状痕と微小剥離痕が観察されたのは12点で比率としては非常に低い。腰岳産黒曜石製細石刃には2点中1点に使用痕が認められる。

104点中27点（26％）に使用痕が認められ、そのうち線状痕の見られる細石刃12点（11％）という少なさは、第9エリアで見たブロック類型Aの状況と同じである。

本ブロックは、これまで見てきたブロックに時期的に見て先行する可能性が高い。しかしながら、霧島系黒曜石を主体として腰岳産黒曜石が少量（細石刃2点）組成されるという状況は、第9エリアや第12エリアの状況と変わらない。第51ブロックと隣接する第52ブロック（細石刃36点中2点）も基本的に同様である。したがって、こうした状況は時期的に見ても基本的に変化することはないということが言える。

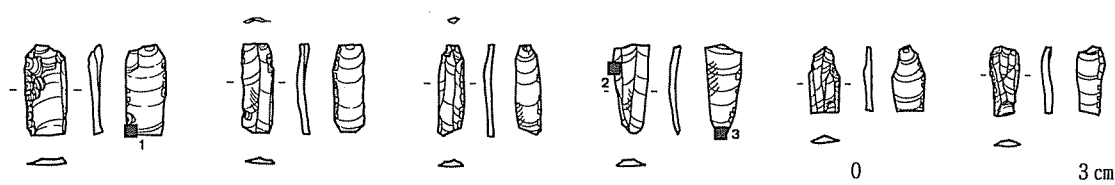
#### ブロック類型B 第17・18遺物集中部（国土交通省桐木調査区）

直径2mほどの第17遺物集中部には、26点の細石刃が存在する。石材は全て霧島系黒曜石である。使用痕は20点に見られ、そのうち5割を超える14点に線状痕と微小剥離痕が観察される。

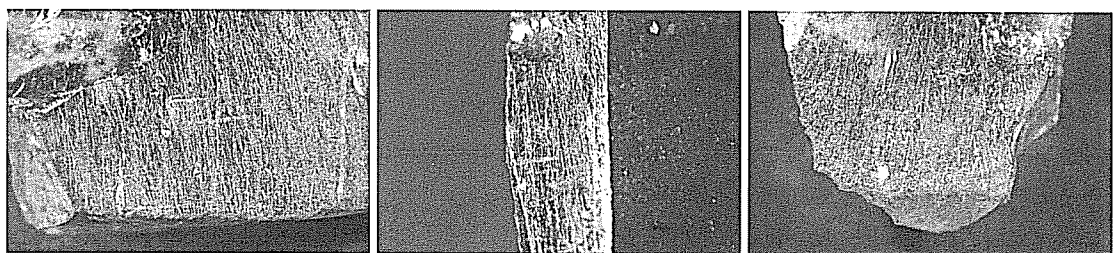
第18遺物集中部には18点の細石刃が存在する。石材は全て霧島系黒曜石である。細石刃18点のうち

14点に使用痕が見られ、そのうち8点に線状痕と微小剥離痕が観察される（第10図、写真2）。このブロックでも同様に線状痕の見られる細石刃の比率が4割を超える。この状況は上のブロック類型Aの状況との差異を明瞭にしていると思われる。

また、第7エリア第7ブロックのように頁岩製細石刃のみで構成されるブロックもある。本ブロックにおいて直径2mほどの範囲に120点もの細石刃が密集して分布しており、この例はブロックBの密集性を指し示すものと考えられる。ほとんど全て頁岩製であったために、残念ながら使用痕の観察はできなかった。しかし、こうした細石刃が製作されたとは考えられないブロックが存在していることは重要である。



第10図 第18遺物集中部の使用痕を有する細石刃 (S=1/1)



1. 折断面に見られる密集する線状痕      2. 刃部に平行する線状痕      3. 折断面に見られる密集する線状痕

写真2 細石刃に観察される線状痕 (100倍)

### 3.5. 小結

①ブロックは細石刃の製作が行われたと考えられる類型Aと細石刃のみが廃棄されたと考えられる類型Bとに細分可能である。これはブロックそれぞれが機能的な差異を有しながら遺跡内に存在している可能性を示唆している。ブロックは全てが等質的なものではなく、それは使用痕分析の結果からも裏付けられる。

②ブロック類型Aと類型Bとを比較した場合、後者の細石刃のほうが使用痕を有する細石刃が多い。特に、搬入品と考えられる細石刃には使用痕を有する比率が高い。桐木耳取細石刃石器群においては、腰岳産黒曜石製細石刃がこれにあたる。ただし、遺跡内で製作されたと考えられる石材製の細石刃ブロックでは、このことは一概には言えない。

③ブロック類型Aの細石刃にも、少なからず使用痕を有する細石刃が存在する。このことは、ブロックが細石刃製作だけの痕跡ではないことを示唆している。もし、これが細石刃製作が行われたものと同一個体の細石刃であるならば、回帰的な集団行動によって残されたものと推測可能である。

#### 4 東南部九州細石刃石器群における石器石材利用

##### — 腰岳産黒曜石製細石刃のコア・リダクションの視点から —

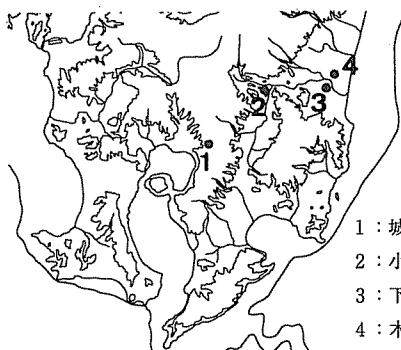
腰岳産黒曜石が南九州まで広がるという事実はよく知られている。ただし、この黒曜石製石器がどのような状況で南九州にもたらされたかということに関して検討が十分ではない。桐木耳取細石刃石器群において腰岳産黒曜石製細石刃のほとんどは製作された痕跡が認められない。それを端的に示しているのが第9エリアの使用痕を有する細石刃のブロックである。

第9エリアの腰岳産黒曜石製細石刃のブロックについて、線状痕と微小剥離痕の両者が認められるものが15個体、微小剥離痕のみ認められるものは3個体である。第9エリアのそれ以外のブロックでは、線状痕と微小剥離痕の両者が認められるものが6個体、微小剥離痕のみのものが12個体である。実験結果から、線状痕と微小剥離痕の違いが使用頻度の多寡にあるとすれば、霧島系黒曜石製細石刃よりも線状痕の出現頻度の高い腰岳産黒曜石製細石刃は、より使い古されたものであると理解される。これら腰岳産黒曜石製細石刃の製作痕跡は、少なくとも桐木耳取細石刃石器群の中には認められない。そうならば、どこか別の場所にその痕跡がなければならぬ。ここで大隈半島北部のその他の遺跡の状況を見てみることにする。なお、ここでの分析対象は全て、野岳・休場型細石刃核を有する石器群である。

#### 4.1 東南部九州の他石器群の様相 (第11図)

城ヶ尾遺跡Ⅳ・Ⅴ文化層：鹿児島県霧島市<旧福山町> (馬籠編2003)

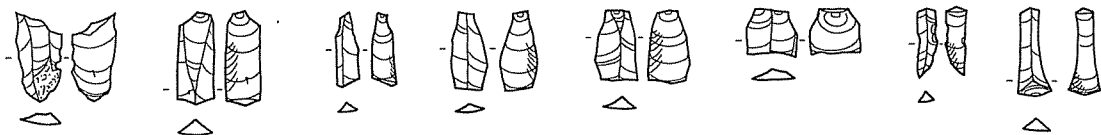
本遺跡は、大隈半島北部に位置する。細石刃石器群はⅣ層とⅤ層から検出されており、第Ⅳ文化層と第Ⅴ文化層とに区分されている。これらの文化層は自然層位によって区分されており、接合資料や個体別資料分析によって厳密に区分されたわけではない。平面的に見ると、Ⅳ文化層に属する遺物のほとんどはB地区から出土しており、Ⅴ文化層に属する遺物のほとんどはC地区から出土している。同一地区で層位的に出土したものではないため、2つに分けられた文化層は1つに統合される可能性もある。ブロックはB地区で10、C地区で3つ認識されているが、この中で細石刃製作が行われたと考えられるブロックは4ブロック程度である。



- 1 : 城ヶ尾遺跡
- 2 : 小田元第2遺跡
- 3 : 下星野遺跡
- 4 : 木脇遺跡

第11図 検討対象遺跡

細石刃が製作されたと思われるブロックでは、上牛鼻産黒曜石製石器を主体としており、「霧島系」黒曜石を主体とする桐木耳取細石刃石器群とは異なる。細石刃核は野岳・休場型を主体としており、その点では桐木耳取と同じである。本細石刃石器群における腰岳産黒曜石製石器は、やはり細石刃のみである (第12図)。しかもB地区で2点、C地区で6点と非常に少ない。桐木耳取とは異なり、腰岳産黒曜石製細石刃のみで1ブロックを形成するような



第12図 城ヶ尾細石刃石器群における腰岳産黒曜石製細石刃 (S=1/1)

0 3 cm

状況ではない。

城ヶ尾細石刃石器群には、桐木耳取細石刃石器群と同様に、遺跡近傍で採取される石材製石器の中に数点の腰岳産黒曜石製石器が少量組成される。これは城ヶ尾遺跡に近接する前原和田遺跡でも同様な状況であり、おそらく大隈半島北部地域に位置する細石刃石器群の石器石材利用の特徴であると考えられる。

それでは、さらに腰岳から距離的に離れた宮崎県下の細石刃石器群の3つの石器群を検討する。これらの石器群に共通する特徴は、腰岳産黒曜石が1点のみで持ち込まれている点である。

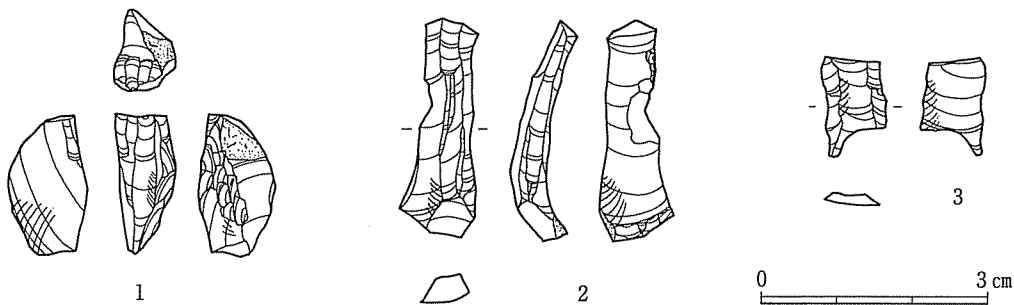
**小田元第2遺跡：宮崎県東諸県郡高岡町（島田編2003）**

小田元IV期とされた細石刃石器群は、垂直方向の移動が顕著で出土層位の限定は困難であるとされているものの、細石刃核のほとんどが6～7層から出土していることから、6～7層の境界付近に包含されていた可能性が高いという。IV期のもとのされた遺物総数は46点で、その内訳は細石刃21点、細石刃核24点、局部磨製石斧1点である。細石刃・細石刃核の抽出から文化期が設定されているため、共伴遺物は不明である。

細石刃・細石刃核の石材は黒曜石を主体とし、流紋岩、ホルンフェルスで構成される。細石刃10点、細石刃核13点を含むほとんどの黒曜石製石器に対して、蛍光X線分析が実施されており、有益な情報が得られている。細石刃10点の内訳は、内屋敷 UT 遺物群と推定されたもの5点、桑ノ木津留産5点、細石刃核13点の内訳は、内屋敷 UT 遺物群と推定されたもの6点、桑ノ木津留産5点、上牛鼻産1点、腰岳産1点である。ここでは腰岳産黒曜石製の細石刃核が出土しているものの、腰岳産と推定されたものはその他剥片類も含めてこの1点のみである（第13図1）。しかも、細石刃核を詳しく観察すると、非常に小型で、稜線のつぶれも著しい。さらに1点のみということも考え合わせると、この細石刃核は使い古された状態で遺跡内に持ち込まれたと判断できる。

**下星野遺跡：宮崎県宮崎郡清武町（鳥原・柳田2001）**

下星野遺跡はA～C区という3区に分けられており、細石刃石器群が検出されたのはこのうちC区である。細石刃石器群は主にIV a層とされる小林軽石を含む層から出土している。細石刃石器群のものと思われる石器の内訳は、細石刃10点、細石刃核13点、スクレイパー・微小剥離痕のある剥片14点である。細石刃・細石刃核の石材は、黒曜石を中心として砂岩と頁岩の細石刃1点ずつで構成されている。黒曜石の理化学的な原産地推定は行われていないものの、肉眼観察によると、黒色透明で不純物が入る「霧島系」黒曜石、アメ色を呈する桑ノ木津留産や漆黒色透明の腰岳産黒曜石で組成される。このうち注目すべきは、1点だけ出土している腰岳産黒曜石製細石刃である（第13図2）。



第13図 宮崎平野における腰岳産黒曜石製石器（1：小田元第2 2：下星野 3：木脇）(S=1/1)

木脇遺跡：宮崎県宮崎郡清武町（倉永編2001）

木脇遺跡はA～E区に分けて調査されている。細石刃石器群に属する遺物は、このうちA区の第1ブロック周辺に集中的に分布しており、内訳は細石刃7点、細石刃核5点である。出土層位は明確に記されていないものの、垂直分布からみて、Ⅶb層あたりから出土しているものと思われる。Ⅶb層には小林軽石 [Kr-Kb : 16700B.P.]（町田・新井2003）がブロック状に含まれるということから見ても、その蓋然性が高い。

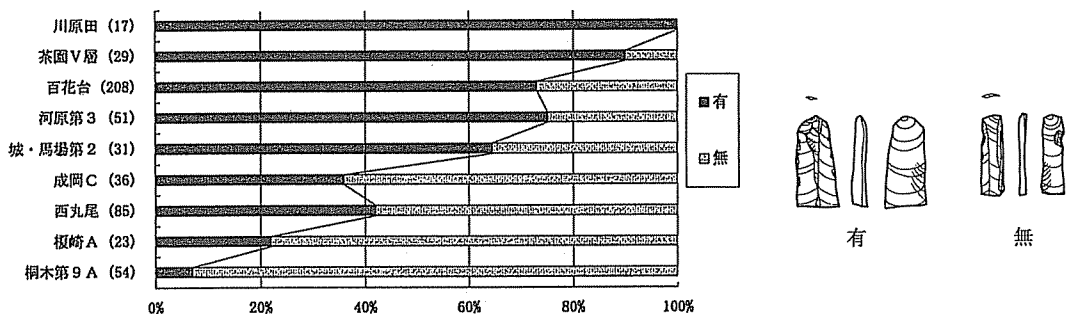
さて、A区第1ブロックから出土した細石刃及び細石刃核は全て黒曜石製である。その大部分は、黒色透明で若干の不純物を含む「霧島系」黒曜石とアメ色を呈する桑ノ木津留産黒曜石製の石器である。しかし、1点のみ腰岳産と思われる漆黒色透明の細石刃が存在する（第13図3）。本石器群においてもこうして単体で腰岳産黒曜石が入っている。

その他の遺跡にも、黒曜石製石器で構成される細石刃石器群が存在する。これらの石器群は、霧島系黒曜石、桑ノ木津留産黒曜石製石器で構成されており、西北九州産黒曜石はほとんど入っていない。

#### 4.2. 誰によって剥がされた細石刃か？

桐木耳取遺跡・城ヶ尾遺跡などの大隈半島北部や宮崎平野部の細石刃石器群には、細石刃が製品の状態で遺跡内に搬入されている可能性が高いことが明らかにされた。では、一体この細石刃はどこで剥がされたものであろうか。これらの腰岳産黒曜石製の細石刃には共通する特徴がある。それは頭部調整が施されないということである。これは同一遺跡内にある他石材で製作された細石刃と同様な特徴である。ところが、同じ野岳・休場型細石刃核をもつ石器群で、腰岳産黒曜石を主体的に用いる阿蘇周辺の細石刃石器群（亀石山遺跡・河原第3遺跡）の細石刃（今田編2003、芝編2004）には、ほとんど全てのものに頭部調整が認められる。この点に関しては宮田栄二の重要な指摘がある。宮田によれば、南九州の細石刃石器群においては、細石刃文化の古い段階から縄文時代草創期段階まで細石刃の頭部調整がほとんど施されていないという（宮田2000）。この指摘は、頭部調整の実施の有無が、細石刃製作の担い手は誰かということを考える一つの方法となりうることを示しているのではないだろうか。

ここで、野岳・休場型細石刃核を有する細石刃石器群における頭部調整の有無を比較してみたい。第14図を見ると、北部九州から中九州にかけての石器群において頭部調整が施される割合が60%を超える。これに対して、南九州の細石刃石器群では頭部調整の施される割合が40%を割り込む。この点から、確かに南九州で出土する細石刃は頭部調整が施されない傾向があると言える。こうした現象の



第14図 野岳・休場型細石刃核を有する細石刃石器群における頭部調整の実施率



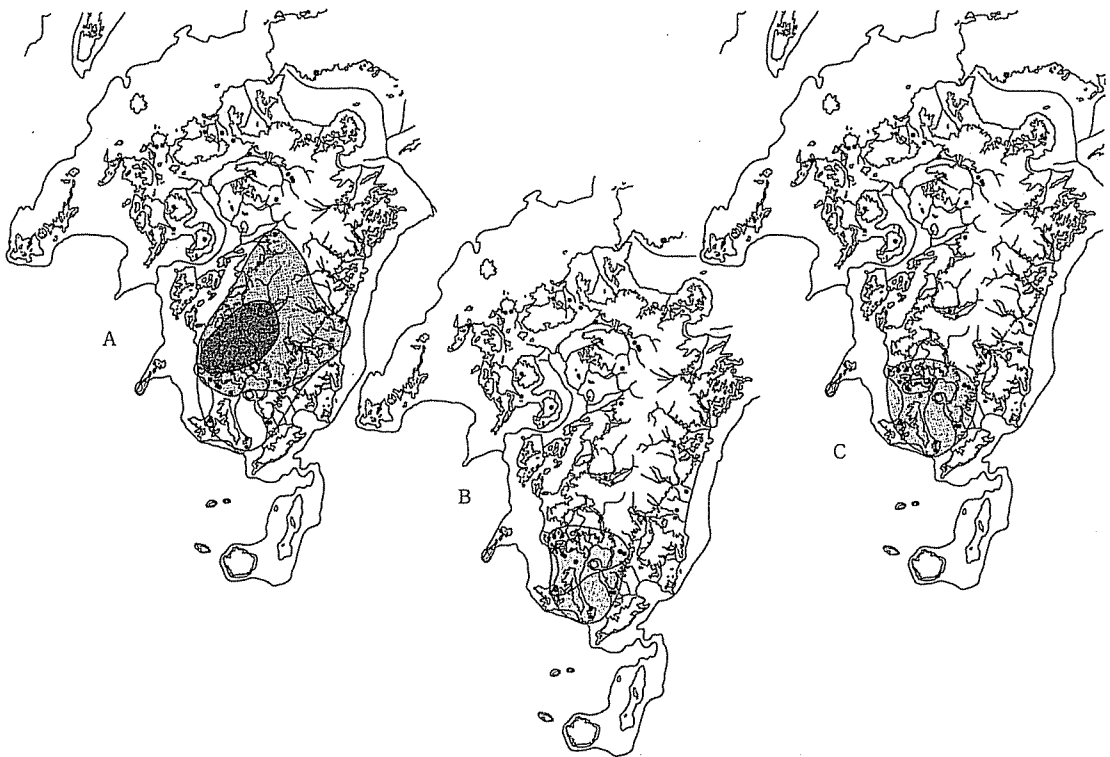
背後にあるものは何であろうか。宮田は、南九州において独自の製作工程と細石刃核固定方法が継続していた可能性を考えている。宮田の論では、南九州に腰岳産黒曜石が入ってきた時点ですでに、南九州で独自の細石刃製作が行われていると考える必要がある。この評価は難しいが、筆者としても北部九州や中九州とは異なる人々によって細石刃が製作されたと考えておきたい。

#### 4.3. 南九州産黒曜石の分布

南九州原産黒曜石製の細石刃及び細石刃核の分布範囲を示したのが第15図A～Cである。これを見ると、最大の分布範囲をもつ桑ノ木津留産黒曜石でさえも、阿蘇南外輪山に位置する河原第3遺跡がその分布限界となっている。その他の上牛鼻産黒曜石、三船産黒曜石は現在の鹿児島県域とほぼ同じくらいの分布範囲であり、非常に狭い。特に、細石刃核を50%以上組成するような石器群は、局地的な分布を示す。霧島系黒曜石がどのくらいの範囲に分布しているかについては、もう一度黒曜石の原産地同定を行う必要がある。筆者の実見した範囲では、今のところ中九州の細石刃石器群にはこうした黒曜石は見られず、中九州以北には分布は広がらない。

#### 4.4. 石器石材利用からみた東南部九州細石刃石器群の石材利用とその特質

遺跡内で細石刃製作が行われる石材 桐木耳取細石刃石器群においては、霧島系黒曜石を主体として桑ノ木津留産、上牛鼻産、三船産黒曜石を用いて細石刃製作が行われる。近隣の城ヶ尾細石刃石器群においては、上牛鼻産黒曜石を主体として、霧島系、三船産、桑ノ木津留産を用いて細石刃製作が行われる。この南九州原産もしくは近傍の石材を主体的に用いることは、例えば、蛍光X線分析の行われている小田元第2細石刃石器群においても、「霧島系」黒曜石、桑ノ木津留産黒曜石を主体的に



第15図 南九州産黒曜石の分布範囲<sup>9)</sup> (A: 桑ノ木津留産 B: 上牛鼻産 C: 三船産)

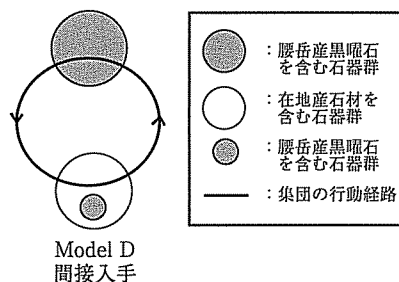
用いられているように、東南部九州細石刃石器群の特徴でもある。この霧島系、桑ノ木津留産、上牛鼻産、三船産のような南九州産黒曜石は、南九州のみに局地的な分布を示し、北部九州まで分布することはない。この事実から、上記の特徴は南九州細石刃石器群の特徴である可能性もある。こうした近傍の黒曜石原産地を取り込んだ行動形態は、霧島系黒曜石の大量消費や遺跡内で製作されたと考えられる細石刃の使用痕などから、遺跡への回帰行動の可能性を示している。

**製品の状態で搬入される石材** こうした石器群の中に腰岳産黒曜石が細石刃数点もしくは1点のみで搬入されている。この点にこそ、東南部九州細石刃石器群における石材利用の特徴がある。桐木耳取細石刃石器群における細石刃の使用痕分析から裏付けられたように、その細石刃はその他の石材製のものよりも使い古されており、他より使用痕の著しいものが多い。それは道具としての使用頻度の高さや使用場面の多さを示すもので、移動距離や時間の長さに関連している。その後、これらは石器としての役割を東南部九州で終え、遺跡に残されることになる。こうして使い古された細石刃は、頭部調整がほとんど施されていないことから、北部九州や中九州ではなく、南九州のどこかで製作された可能性が高い。しかし、その痕跡は今のところ東南部九州では確認できない。以上から、腰岳産黒曜石の入手は直接的に腰岳に赴いて入手したというよりは、間接的に入手していることが想定される。

**遠隔地産石材と在地産石材の入手** 在地産石材と遠隔地産石材の搬入形態の違いや細石刃に見られる使用痕の差異は、両者の入手方法の違いを示しているものと考えられる。遠隔地産石材である腰岳産黒曜石の入手方法は、そうした差異を考慮すると、間接的入手であると考えるのが妥当である。すなわち、第2章で想定したモデルの中で最も可能性の高いのはModel Dである。当然そこには集団間の「もの」の交換が存在していたということになる。この交換に関しては、今のところ南九州の石材が北部九州の細石刃石器群にはほとんど組成されないところから見て、等価性のとれていない「一般化された相互性」程度の交換（Shalins1972）であった可能性が高い。南九州産の黒曜石の分布範囲などから判断して、少なくとも東南部九州の細石刃石器群を残した集団は、北部九州の黒曜石産地に赴いているような状況は想定されないこと、細石刃の頭部調整が南九州で出土する細石刃にはほとんど施されないことはその傍証である。

一方の在地産石材の入手は霧島系黒曜石や桑ノ木津留産、上牛鼻産黒曜石を大量消費している点から、直接採取が考えられる。しかし、遺跡で製作されたであろう細石刃に使用痕が見られること、多様な石材がブロック内に少しずつ組成されていることから、遺跡地への回帰性や石材採取が日常的な行動（狩猟採集活動）の一環に組み込まれている、いわゆる「埋め込み戦略」（田村1992）が内在しているものと考えられる。南九州の黒曜石原産地と遺跡地との周回移動の際に、遠隔地石材である腰岳産黒曜石を石核かもしくは製品の状態で入手していることが想定される。そしてその中で遠隔地石材を入手していたと想定される。

細石刃石器群研究における行動論的研究は、湧別技法の拡散を行動形態に引きつけて論じるものが多い（稲田編など）。稲田孝司は、その西限に近い恩原2遺跡M文化層石器群を評価して、その石材組成から、長距離移動に特化した石器群であるという見方を示し、その石器群が在地化することを目的とした植民集団によって残された石器群であ



Model D  
間接入手

第16図 想定される入手モデル

るとした(稲田編1996)。この450kmに及ぶ長距離移動に対して、光石鳴巳は、湧別技法石器群が「石材運搬、その石器装備に対する補充の必要といった側面においてきわめて合理的な運用が可能な内容で、そうした技術構造をもつ石器製作体系を可能にしたこと」が長距離にわたる移動を可能にさせたという(光石2004)。

系統が異なる石器群を単純に比較対象に置くことはできないが、このような東南部九州細石刃石器群における石材入手戦略から見て、行動領域やそのパターンとは対照的な関係にある。東南部九州細石刃石器群において、長距離移動もちろん存在していた可能性はあるが、少なくとも今回の分析からは長距離移動を伴う行動は想定できない。そこには遺跡近傍の黒曜石原産地を取り込む行動を基本としながら、その過程において遠隔地石材を入手するというのが東南部九州の細石刃石器群を残した集団の行動であると考えられる。

### おわりに

本論では、東南部九州における細石刃石器群の中に含まれる遠隔地産石材(腰岳産黒曜石)がどのような過程で遺跡内に持ち込まれたのか、ということについて検討した。その結果、そこには在地産石材を入手するために黒曜石産地を行動領域に取り込んだ集団行動があり、その過程で遠隔地産石材である腰岳産黒曜石を入手していることが想定された。

最後に今後の課題と展望を示したい。東南部九州地域という非常に狭い地域を対象としているため、これを一般化することはできない。今後は、今回考察した東南部九州細石刃石器群を残した集団行動が、どこまで適用できるかを検討する必要がある。さらに、今回の結論からこの集団間の交換を想定したが、集団の接触に関しては、それがどの程度のものであったかどうかは検討できていない。特に野岳・休場型と船野型との関連性やその他型式との関連性など追求しなければならない点は数多い。今後はこれらの点について、南九州全体ひいては九州全体の細石刃石器群に見られる石材の原産地とその消費地という関係性を、細石刃の「使用」という局面を考慮することによって、描き出していきたい。

謝辞 本稿を草するにあたり、甲元眞之先生、木下尚子先生、小畑弘己先生、杉井健先生にあたたかいご指導いただきました。また、鹿児島県埋蔵文化財センター、宮崎県埋蔵文化財センターでの資料調査や様々な研究会で、多くの方々にご指導やご助言いただき大変お世話になりました。ご芳名を記して感謝の意を表します。

今田秀樹、岡本真也、川道寛、桑波田武志、杉原敏之、中村和美、日高広人、馬籠亮道、松ヶ野恵、松本茂、宮田栄二、村崎孝宏、吉留秀敏 (敬称略、五十音順)

### 注

- 1) 南部九州の定義は、町田章(2001)による。この中で南部九州は九州山地、宮崎平野から大隈半島、種子島・屋久島地域、およびその西の南部九州火山地域とされる。この中で東南部九州は明確に定義されていないが、このうちの宮崎平野から大隈半島にかけての地域として論を進めていく。したがって、在地産石材は南部九州原産の石材、遠隔地石材はそれ以外の地域原産の石材となる。

- 2) ただし、X II層に出土層準をもつ細石刃石器群は耳取調査区にしかなく、X I層に出土層準をもつ石器群は桐木調査区にしかないことは注意を要する。このことは、これらがすぐに時期差に結ぶつくものではないことを示唆している。
- 3) CH=チャート、SH=頁岩、CR=水晶、その他地名が入っているものは黒曜石産地の名称である。この表に載せていないエリア、集中部では細石刃石器群が出土していないため掲載していない。表中のトーンは主体となる石材を示す。
- 4) 図中の火山灰の年代については、町田・新井2003による。
- 5) 野岳・休場型単純段階について、九州において最古段階に位置づける考え方が定着しつつある。確かに茶園遺跡、亀石山遺跡などの石器群の細石刃核のほとんどは野岳・休場型と言えるが、純粋な野岳・休場型が単純組成される石器群はほとんど存在しない。この単純段階が本当に存在するのかどうかについて、野岳・休場型の定義も含めてもう一度議論する必要がある。
- 6) 筆者は2002年度に熊本大学文学部に提出した卒業論文の中でこうした編年を行った。桐木耳取遺跡だけでなくその他の遺跡を検討した上でこのような編年を行っている。この詳細は別稿にて論じたい。
- 7) 本来ならば100~200倍で観察すべきであるが、ルーペで観察した時点ですでに線状痕が見られた点、使用の有無を観察対象とした点から、この倍率でも十分対処できると判断した。遺跡内での使用の有無の相対的な比較であり、倍率を上げてもおそらく傾向に影響はないと考えられる。
- 8) この実験は2回行った。1回目は2003年12月に行い、対象物に魚(サケ)を用いた。2回目は2004年7月に行い、対象物に骨、皮付きの肉を用いた。両者の実験では剥片及びナイフ形石器を実験製作し、刺突(10回、20回、50回)とsawing(10回、30回、50回、100回、200回、400回)とに分けそれぞれ作業を行った。その結果、両実験においてsawing100回を境にして線状痕が出現することが分かった。
- 9) 図中のトーンについて、最も濃いものが、全体の細石刃核の50%以上を占める石器群、二番目に濃いものが細石刃核を有する石器群、一番薄いものが、細石刃のみ組成される石器群。なお、地図中にあるドットは、野岳・休場型細石刃核をもつ細石刃石器群の場所を示す。

#### 引用・参考文献

- 稲田孝司編 1996『恩原2遺跡』恩原2遺跡発掘調査団
- 萩 幸二 1998「旧石器時代の九州地方の石器石材について」『古文化談叢』第40集 九州古文化研究会 pp.105-163
- 小野 昭 1975「先土器時代石材運搬論ノート」『考古学研究』21-4 考古学研究会 pp.17-19
- 小畑弘己 2001『シベリア先史考古学』中国書店
- 梶原 洋 1991「石器群形成に及ぼす石材環境の意義」『北からの視点』日本考古学協会1991年度宮城・仙台大会実行委員会 pp.51-62
- 川道 寛 1997「長崎島の細石器編年」『九州の細石器文化』九州旧石器文化研究会 pp.129-136
- 絹川一徳 1995「石器原石の獲得と石器生産」『展望考古学』考古学研究会 pp.24-32
- 国武貞克 2005「後期旧石器時代前半期の居住行動の変遷と技術構造の変容」『物質文化』78 物質文化研究会 pp.1-25
- 桑波田武志1997「鹿児島県の細石刃石器群編年」『九州の細石器文化』九州旧石器文化研究会 pp.215-222
- 桑波田武志1998「細石刃文化期における石材利用状況と細石刃核の分類」『鹿児島考古』第32号 鹿児島考古学会 pp.13-24
- サーリンズ・山内昶訳1984『石器時代の経済学』法政大学出版会

- 芝康次郎 2005 「2 出土石器実測図」『天瀬町埋蔵文化財発掘調査報告書』第8集 天瀬町教育委員会 pp.11-18
- 田村 隆 1990 「第2節 野見塚遺跡の先土器時代—コア・リダクションと狩猟採集戦略—」『千葉県文化財センター調査報告』第174集 千葉県文化財センター pp.263-280
- 田村 隆 1992 「石材の諸問題」『考古学ジャーナル』No.345 ニュー・サイエンス社 pp.2-7
- 田村 隆 2005 「この石からどこからきたのか」『考古学』Ⅲ 安齋正人 pp.1-72
- 堤 隆 1991 「細石刃に残された損傷—中ッ原第5遺跡B地点出土細石刃の使用痕分析—」『中ッ原第5遺跡B地点の研究』八ヶ岳旧石器研究グループ pp.97-115
- 堤 隆 1996 「削片系細石刃石器群をめぐる技術組織の異相—中ッ原細石刃石器群を中心にして—」『古代』102 早稲田大学考古学会 pp.36-61
- 寺崎康史 1999 「北海道細石刃石器群理解への一試論」『先史考古学論集』第8号 安齋正人 pp.71-88
- 長崎潤一 2000 「リダクション」『用語解説 現代考古学の方法と理論』Ⅲ 同成社 pp.234-240
- 春成秀爾 1976 「先土器・縄文時代の画期について(1)」『考古学研究』22-4 考古学研究会 pp.68-92
- 藤木 聡 2002 「先史時代における黒曜石の利用—黒曜石の消費地 宮崎—」『Stone Sources』No.1 石器原産地研究会 pp.59-62
- 馬籠亮道 2002 「南九州の黒曜石原産地について」『Stone Sources』No.1 石器原産地研究会 pp.14-20
- 町田章 2001 「3 南部九州 概説」『日本の地形7 九州・南西諸島』東京大学出版会
- 町田章・新井房夫 2003 『新編 火山灰アトラス [日本列島とその周辺]』東京大学出版会
- 松本 茂 2003 「東南部九州の細石刃石器群」『日本の細石刃文化』Ⅰ 八ヶ岳旧石器研究グループ pp.368-414
- 光石鳴巳 2004 「湧別技法と集団関係」『中四国地方旧石器文化の地域性と集団』中・四国旧石器文化談話会 pp.247-258
- 御堂島正 1982 「エッジ・ダメージの形成に関する実験的研究」『中部高地の考古学』Ⅱ 長野県考古学会 pp.66-98
- 美安慶子 1996 「細石刃の語るもの」『中ッ原第1遺跡G地点の研究』Ⅱ 八ヶ岳旧石器研究グループ pp.119-138
- 宮田栄二 1994 「鹿児島県下の石器の材質」『大河』第5号 大河同人 pp.2-9
- 宮田栄二 2000 「細石刃の打面と頭部調整について—細石刃製作技術の追求のために—」『九州旧石器』第4号 九州旧石器文化研究会 pp.203-214
- 宮田栄二 2002 「鹿児島県の非黒曜石石材と原産地」『Stone Sources』No.1 石器原産地研究会 pp.21-24
- 宮田栄二 2004 「九州地方—九州細石刃石器群の東西対極構造と集団—」『中四国地方旧石器文化の地域性と集団関係』中・四国旧石器文化談話会 pp.159-172
- 吉留秀敏 1983 「九州における先土器時代の石器群集中分布の構造」『古文化談叢』第11集 九州古文化研究会 pp.117-148
- 米田 寛 2002 「細石刃の使用と場の機能」『法政考古学』第28集 法政考古学会 pp.1-26
- 綿貫俊一 1992 「九州の旧石器石材」『考古学ジャーナル』No.345 ニュー・サイエンス社 pp.28-33
- 綿貫俊一 2002 「九州の旧石器時代後期から縄文時代草創期の石材入手とその消費」『Stone Sources』No.1 石器原産地研究会 pp.66-77

## 報告書出典および図版出典

第1・2・11・14・16図 筆者作成。 第3・5・6・7・8図 長野・馬籠ほか2005をもとに作成。  
 第4図 長野・馬籠ほか2005より抜粋、実見の上で一部改変。 第9・10図 筆者実測、トレース。  
 第12図 馬籠編2003より抜粋、実見の上で再トレース。 第13図 各報告書より抜粋、再トレース。  
 第15図 筆者作成。遺跡と報告書出典は以下に示す。茶園遺跡：川道寛編1998「茶園遺跡」『岐宿町文化財調報』第3集 岐宿町教育委員会／中の原遺跡：萩原博文1994「中の原遺跡Ⅱ」『平戸市の文化財』  
 37平戸市教委／川原田遺跡：松尾吉高1983「川原田遺跡」『肥前町文化財調報』3肥前町教委／菅牟田黒龍遺跡：田島龍太編1985「菅牟田黒龍遺跡」『唐津市埋文調報』11唐津市教委／鷹野A遺跡：副島和明・伴耕一朗編「諫早中核工業団地造成に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査報告書Ⅲ」『長崎県文化財調報』85長崎県教委／百花台遺跡：麻生優・白石浩之1976「百花台遺跡」『日本の旧石器文化3』雄山閣、村川逸郎ほか編1994「県道国見雲仙線改良工事に伴う埋蔵文化財調査報告書」『長崎県埋蔵文化財調査報告書』  
 116長崎県教委／野黒坂遺跡：松岡史ほか編1970「野黒坂遺跡」『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告』(1)福岡県教委／井尻B遺跡：吉留秀敏ほか編1988「井尻B遺跡」『福岡市埋文調報』175福岡市教委／春園遺跡：木下修編1993「宮巡遺跡・春園遺跡・十三塚遺跡」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告』(26)福岡県教委／大草平遺跡：木下修編1983「大草平」『星野村文化財調報』1星野村教委／亀石山遺跡：今田秀樹ほか2003「高瀬Ⅲ遺跡・亀石山遺跡」『天瀬町埋文発調報』7天瀬町教委／五馬大坪遺跡：綿貫俊一・坂本嘉弘1989『五馬大坪遺跡』天瀬町教委／平草遺跡：栗田勝弘編1982『平草遺跡』天瀬町教委／河原第3遺跡：宮本千恵子編2003「河原第3遺跡2」『考古学研究室報告』38熊大考古、芝康次郎編2004「河原第3遺跡3」『考古学研究室報告』39熊大考古／城・馬場遺跡第2地点：宮坂孝宏編1991「上・馬場遺跡第2地点」『熊本県文化財調報』119熊本県教委／白鳥平A遺跡：宮坂孝宏編1993「白鳥平A遺跡」『熊本県文化財調報』127熊本県教委／木場A遺跡：新谷英樹・児玉健一郎編「木場A遺跡2」『栗野町埋文発調報』(2)栗野町教委／床並B遺跡：堂込秀人1993「床並B遺跡」『入来町埋文発調報』入来町教委／成岡遺跡：牛ノ濱修・宮田栄二編1985「成岡遺跡Ⅱ」『鹿児島県埋文発調報』35鹿児島県教委／大原野遺跡：弥栄久志・相美伊久雄編2002「大原野遺跡」『鹿児島県埋文セ発調報』69鹿児島県埋文セ／栢堀遺跡・西ノ原B遺跡：牛ノ濱修・元田順子編「栢堀遺跡・西ノ原B遺跡」『鹿児島県埋文セ発調報』30鹿児島県埋文セ／今里遺跡：橋口勝嗣編2002「今里遺跡」『鹿児島県埋文セ発調報』33鹿児島県埋文セ／横井竹ノ山遺跡：桑波田武志編「横井竹ノ山遺跡」『鹿児島県埋文セ発調報』67鹿児島県埋文セ／椋ノ原遺跡：上東勝彦ほか1998「椋ノ原遺跡」『加世田市埋文発調報』加世田市教委／平田尻遺跡：上東克彦ほか1999「平田尻遺跡」『加世田市埋文発調報』加世田市教委／志風頭遺跡：上東勝彦・福永裕暁1999「志風頭遺跡」『加世田市埋文発調報』16加世田市教委／小牧3A遺跡：長野眞一編「小牧3A遺跡・岩本遺跡」『鹿児島県埋文セ発調報』15鹿児島県埋文セ／水迫遺跡：下山覚ほか2002「水迫遺跡Ⅱ」『指宿市教委発調報』指宿市教委／城ヶ尾遺跡：馬籠亮道ほか2003「城ヶ尾遺跡」『鹿児島県埋文セ発調報』69鹿児島県埋文セ／中原一成編2004「桐木遺跡」『鹿児島県立埋文セ発調報』75鹿児島県埋文セ、長野眞一・馬籠亮道ほか2005「桐木耳取遺跡」『鹿児島県埋文セ発調報』91鹿児島県埋文セ／西丸尾遺跡：宮田栄二編1992「西丸尾遺跡」『鹿児島県埋文発調報』64鹿児島県教委／榎崎A遺跡：青崎和憲他「榎崎A遺跡」『鹿児島県埋文発調報』63鹿児島県教委／北牛牧第5遺跡：草薙良雄・山田洋一郎2003「北牛牧第5遺跡・銀座第3A遺跡」『宮崎県埋文セ発調報』80宮崎県埋文セ／木脇遺跡：倉永秀季編2001「木脇遺跡」『宮崎県埋文セ発調報』43宮崎県埋蔵文化財センター／下星野遺跡：鳥原孝仙編2001「権原第1遺跡・下星野遺跡」『宮崎県埋文セ発調報』第47集 宮崎県埋文セ／小田元第2遺跡：島田正浩編2003「小田元第2遺跡」『高岡町埋文報』第29集 高岡町教委（紙幅の都合で略称を用いたところもある。）

## The Characteristics of Procuring and Using lithic raw material in Microblade Industries of Southeastern Kyusyu

SHIBA Koujiro

The purpose of this paper is to explain how raw materials obtained at greater distances from the sites, Koshidake obsidian, were procured and used by people that remained microblade industries of southeastern Kyusyu. The author assumed four models of Koshidake obsidian procuring method as embedding strategy, direct extraction and exchange. Through case study on usewear analysis of microblades at Kirikimitorori site, the author observed that the proportion of utilized microblade that made of non-local lithic materials, Koshidake obsidian, is higher than made of local lithic materials, Kirisima and Kamiushibana obsidian. It indicates differences of the way of raw materials procurement and length or distance using microblade both of non-local lithic materials and local lithic materials. The author supposed that the former was obtained by exchange, and the later was obtained through embedding strategy. Justly, This is a characteristic of procurement and using lithic raw materials in microblade industries of southeastern Kyusyu.